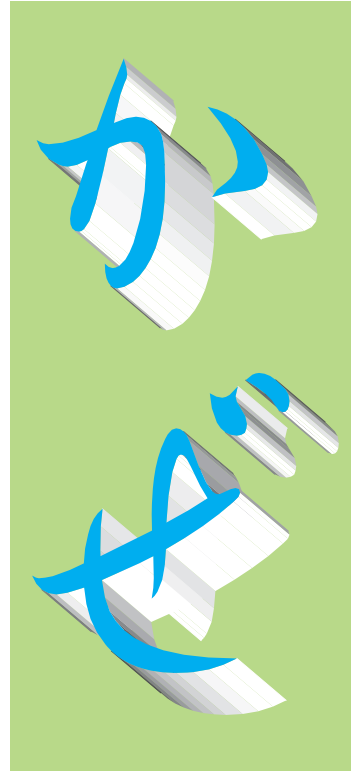


# 福祉ってなあに？

## ～青年部会活動紹介～



<発行>  
 一般社団法人  
 秋田県社会福祉士会  
 <発行責任者> 和田 士郎  
 <事務局>  
 秋田市旭北栄町1-5  
 (秋田県社会福祉会館内)  
 <TEL>  
 018-896-7881  
 <FAX>  
 018-896-7882  
 <MAIL>  
 akitaken-csw@flute.ocn.ne.jp  
 <URL>  
<http://www.akita-csw.org/>  
 編集 広報委員会

- ・企画「福祉ってなあに？」
- ・湯沢サミット開催
- ・令和元年度 社会福祉士全国统一模  
擬試験
- ・成年後見人材育成研修
- ・書籍紹介
- ・ペンリレー

令和2年2月16日(日)、秋田県社会福祉士の有志と青年部会による企画、「福祉ってなあに?」において、寸劇「ふくしマン」と障がい者疑似体験、車椅子体験を秋田県児童会館にて行いました。会場にはたくさんの子どもたちが遊びに来ていました。

今回で4回目となるこの企画は、「子どもや親に介護や福祉を学んでもらいたい。」「暗いイメージだけではなく楽しいイメージで福祉を伝えたい。」という思いから7年ぶりに実現しました。

寸劇「ふくしマン」は、仕事が終わった後、2度集まり、打ち合わせと練習を行いました。小道具の救急車は福祉施設のオムツ用ダンボールを利用して制作したりと福祉職な



車にひかれて救急車に運ばれるノリくん



病院で注射を打たれるノリくん



リハビリをがんばるノリくん



熱演したメンバー

らではの工夫が施されていきました。寸劇を行う事を知らされず思っている遊んでいた子どもたちでしたが、メンバーがステージにあがると興味深そうに集まってきました。本番では、セリフを間違えても、他のメンバーがアドリブで答え、チーム力を発揮しながらすすめていきました。ラストのパプリカの音楽が流れると一緒に踊っている子どももいました。メンバーがステージを降りると、子どもから「今度、いつやるの?」と聞かれています。

障がい者疑似体験と車椅子体験では、秋田県社会福祉協議会様、みらい工房様のご協力により車椅子や障がい者疑似体験グッズをお借りすることができました。車椅子体験や障

がい者疑似体験では、たくさんの子どもたちが集まり、いろいろな形状の車椅子を体験していました。人を上手に避けて、器用に車椅子を操作する子どもも多くいました。東京オリンピック・パラリンピックを契機に車椅子バスケットなど障がい者スポーツも注目を集めています。今回の企画を通して、ポジティブに福祉をとらえられる子どもが少しずつ増えてくれればと思いました。

終演後、メンバーから「子どもにどう伝えられるか考えた。」と感想が聞かれました。「子どもにも、誰にでも分かりやすく、伝わりやすい表現で」の大切さを観劇しながら改めて考えさせられた1日でした。

(記:伊藤 誠 吾)

## 湯沢サミット開催

10月10日・11日、湯沢市の湯沢文化会館を主会場に第2回地域共生社会推進全国サミットinゆざわ「つながる環(わ)を新しい時代につなぐ」人口減少を乗り越えるために今できること」が開催されました。この地域共生全国サミットは介護保険の導入に合わせ、2000年に全国の市町村の持ち回りで始まった「介護保険推進全国サミット」が前身で、2018年から新たに地域住民が地域に積極的な関わりを持つ機運を醸成するという目的の元、「地域共生社会」の推進へとテーマをリニューアルして開催している大会です。

台風が近づき天候が心配される中、全国から地域共生社会の概念創設の背景などを通して地域共生社会への理解を深め、この先の新しい時代における地域の在り方を議論しようとする福祉職を中心に地域福祉やまちづくりを推進する行政関係者など約1000人が参加されました。

1日目には、東京大学名誉教授の大森彌氏をコーディネーターに、橋本厚生労働副大臣と鈴木厚生労働事務次官の基調対談や、厚生労働省社会・援護局長、老健局長と先進自治体首長とのパネルディスカッション、課題先

進地からの提言として開催地・秋田県湯沢市の鈴木市長や湯沢市内社会福祉法人事務局長、自治組織会長からの実践報告を含めた提言がありました。パネルディスカッションでは、「地域共生社会」の理解を深めるための概念創設の背景や検討の状況、地域づくり戦略などがテーマでした。社会構造の変化や人々の暮らしの変化を踏まえ、制度・分野ごとに「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をとともに作っていく社会を目指すことなどが多くの自治体の事例を組み入れながら説明されています。先進自治体からは他人事を我が事に変えていくためにはどうしたらよいか、地域住民における住民同士の「助け合い・支え合い」による「お互い様づくり」や丸ごと相談、断らない相談の実現を目指す地域・行政による伴走支援の確立などが紹介されました。課題先進地・湯沢からの提言では、市民が明るく幸せを実感できる「共創・共同のまちづくり」の提言、地域住民の「困った」を解決できる体制ができていく社会と「相談支援包括化推進員」の紹介、自治組織によるまちづくりが報告され、参加者にとって身近な課題と重なり合う面が多かった内容のようでした。

2日目は3つの分科会が開催されています

分科会Aは一人ひとりによりよい支援する体制づくりをテーマに「人材不足に対応する支援のあり方」について、分科会Bでは生涯現役社会の実現に向けた「人生100年時代の働き方と健康づくり」が、分科会Cでは「みんなのできる持続可能な暮らしの足づくり」がテーマでした。IT・AIの活用や高齢者の豊かな知識と高いスキルを活かした企業の取り組み、高齢化が進む地方での車両デジタル化の取り組みなど豊富な実践報告に、未来への期待と関心が寄せられ、白熱した議論も地域共生社会推進のきっかけとなったのではないのでしょうか。令和2年度は神奈川県鎌倉市での開催となります。湯沢市での議論が新たな実践をつくり、更なる地域共生社会推進に繋がってくれることを期待しています。

(記：佐藤 由紀子)



湯沢サミット会場風景



## 令和元年度 社会福祉士 全国统一模擬試験について

10月5日(土) 中央シルバーエリアにおいて、令和元年度 社会福祉士全国统一模擬試験が開催されました。

この試験は、社会福祉士国家試験の受験者支援の一環として行われており、当日は、約30名の参加者でした。

試験前は参加者同士の会話等はなく、聞かえてくるのは参考書をめくる紙音で静かな会場は本番さながらの緊張感を感じました。

スタッフの方は、会場設営をテキパキとこなし、受付では来訪された参加者一人ひとりに笑顔で「頑張ってください」と声をかけており、自身が受験者ならばその言葉は心強く感じるのだらうと思いました。

参加者の皆さんが本試験を終え、秋田県社会福祉士会に入会くださることを心待ちにしています。

(記：高橋 美和子)



模擬試験会場の受付風景



模擬試験会場の様子

## 成年後見人材育成研修を終えて

斎藤 尚幸

私が成年後見人材育成研修を受講した理由は、地域包括支援センターへ配属になった事がきっかけでした。以前から成年後見制度に關しては苦手意識を抱えていましたが、昨年度から地域包括支援センターへ配属となり、様々なケースとの関わりを通して、成年後見制度について一から学び直す必要があると強く感じ受講を決意しました。

受講期間中は日々の業務に加え、研修課題の提出に追われ、余裕のない毎日を送っていた記憶しかありません。しかし、修了後に振り返ってみると、研修を通して沢山のものを得る事ができたと感じています。

講師の先生、ばあとなあ秋田の会員の方々からの講義や実践報告、他受講者とのグループワークを通して「権利擁護」の専門領域について深く掘り下げて考える事ができ、社会福祉士の専門性について今一度見つめ直す良い機会となりました。講師の先生から「実際には、後見活動の中で学ぶ事が多い。」との話があり、今後は後見活動にも挑戦し、実践の中で研修での学びをさらに深めていきたいと思っています。

そして、研修を通して出会った仲間の存



皆さん真剣な眼差しです



中央シルバーエリアが会場でした

在、「人とのつながり」が一番の財産であると感じています。基礎研修時代から含めると4年の付き合いとなり、共に励まし合い研修を乗り越えてきました。毎月の様に顔を合わせ、研修が生活の一部になっていた為、修了後は暫く「研修ロス」の状態が続いていましたが(笑)研修が終わる事に寂しさを感じる位、周囲に恵まれていたと改めて気付く事ができました。

最後になりますが、研修委員や講師の先生、受講生の皆様、本当にありがとうございました。今回の研修で学んだ事、人とのつながりを大切に、今後の活動に活かしていきたいと思っています。

## 書籍紹介



私がお勧めする書籍は、「丹野智文 笑顔で生きる」認知症とともに」です。認知症は、以前は痴呆症と呼ばれていました。しかし、侮蔑的な意味合いを含んでいることや、症状を正確に表していないことなどから、用語による誤解や偏見の解消を図る一環から検討をおこない、2004年12月に「痴呆」に替わる呼称として「認知症」が最適とされ、今日に到ります。しかし、呼称の変更後も「認知症」という言葉の持つイメージは改善されている印象はありません。

そんな中で、一昨年、丹野智文さんの講演を拝聴しました。認知症当事者の方のリアルな声を聴き、私自身、認知症という言葉に対してのイメージが変わりました。何もできない、忘れてしまうというのは間違いであり、周囲の理解不足から、「何もさせない」とい

う生活を作り出しているのではないかと思うようになりました。

この書籍で丹野さんは、自分が認知症と診断されるまでの不安、診断された時の悲しみや苦しきなど、その時に感じたものを教えてくれています。そして、それでも明るく過ごす認知症の当事者の方と会い、勇気づけられ、自分をサポートしてくれる多くの方の存在に気づき笑顔を取り戻していきます。

昨年の6月18日に認知症施策推進大綱が発表され、認知症当事者の方の声をこれまで以上に反映した地域づくりが目指されます。丹野さんは、認知症になっても積極的に行動することが大切であると話します。そして、失敗しても怒られない環境が必要だと教えてくれています。こういった言葉を大切に今後の業務に努めていきたいと思えます。

(紹介…金野 大志)



私が感銘を受けた本は、寺山修司の「家出のすすめ」です。私がこの本に出会ったの

は、大学の時でした。大学時代の私の最大の悩みは、就職でもなく、恋愛でもなく、親子関係でした。母子家庭で育った私は、常に成績優秀であることを期待され、それに答えようとする子供でした。親が喜ぶことを目の前に置いて生きてきました。進路を決めるのにも親の目ばかりを気にしていました。親子の関係に重苦しさを抱えながらも、いい年をした大人がそんな恥ずかしい悩みを抱えているなんて、誰にも打ち明けられませんでした。そんな私の悩みに耳を傾けてくれたのが、この一冊でした。「もつと自分の人生を生きてもいいんじゃないか。」そう、寺山修司が語ってくれているようでした。寺山修司自身、同じ東北の青森出身で母子家庭に近い境遇で育っているからこそ、惹かれたのかもしれませんが。家族の事だからこそ、家族だからこそ打ち明けられない事は、たくさんあると思います。私自身もそうです。寺山修司の「家出のすすめ」が私の悩みに耳を傾けてくれたように、私自身もソツと耳を傾けられる支援者でありたいと思います。

(紹介…伊藤 誠 吾)



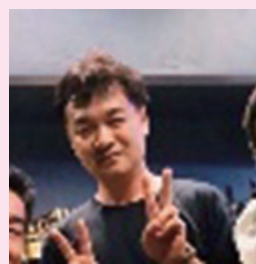


## ペンリレー

## 「生きる喜びと働ける喜び」

特別養護老人ホームゆりの希

管理者 二見 健



武田貴康さんからペンリレーのご指名を頂き、何を書こうかと迷いましたが「東日本大震災」について書きます。

私は宮城県気仙沼市の出身だ。気仙沼市と言えば山と海に囲まれた風光明媚な地域で、2011年3月11日に大きな地震と津波に襲われた。当時私は秋田市内を車の運転中で大きな地震だと気づいて車内のテレビを付けると、自分の出身地が危険だと知った。すぐに消防士の父へ電話をすると消防自動車のサイレンと共に「後で電話する」という一言で電話が切られた。後にテレビを観ると、自分の生まれの町が黒い波にのまれていく姿が映し出され、両親や同級生は大丈夫だろうかという気持ちが湧いてきた。中学の頃は、気仙沼から早く出たいと思っていたが、幼い頃に遊んでいた場所が津波にのまれていく姿を見ると自然に涙が溢れた。気仙沼市は、津波や地震だけではなく火災もあり、観ているのも辛くてどう表現していいのかわからなくなってきた。幸いなことに両親と実家は無事であった。父はチリ地震大津波の教訓から高台の家を買っていた。小学生の頃は、文句を言いながら学校に通っていたが、震災時には父をさすが消防士と思った。震災後、気仙沼に行き、実際に被災地を見た時の悲惨な光景は衝撃的だった。気仙沼線は崩壊し、でかい船が陸に上がっていて、町のすべてがぐちゃぐちゃであった。中学の同級生と会っても何も声をかけられなかった。震災を経験した人としていない人という壁が出来ている感じがあった。

そのような状況であっても「安婆山」の頂上からぐちゃぐちゃになった景色を見ると、気持ちは複雑だが風光明媚な気仙沼で、海も山も綺麗であった。被災したばかりなのに何でこんなに綺麗なのだと思った。海はいないなあとさえ思った。その後、中学の同級生が7名も津波にのまれて亡くなったと知った。そのうちの一人は仲が良く、結婚式にも招待した。彼には婚約をしていた女性があり、避難後に指輪を取りに戻り津波にのまれ、現在も行方不明である。同級生7名の気持ちは分からないが、きっと生きたかったと思っていたに違いない。この経験から生きていること、仕事もあり生活が出来ていることは恵まれていると思うようになった。職場で時々この話をするが、どうしても涙が出てしまいうことになる。あの震災で亡くなった同級生の事を考えると、生きるエネルギーが湧いてくるし、働くエネルギーも湧いてくる。そんな自分は、最高に恵まれていると思ってしまう。

次回は、私がいつもお世話になっております社会福祉法人北杜特別養護老人ホーム中通施設長佐々木将樹さんにペンを渡します。よろしくお願い致します。

## 編集後記

先日、妻の前で「高度10000mから落ちて奇跡的に助かった男」という一人舞台をやって、ことのほかウケたのが、うれしかったです。気分が良かったので、いいネタがないかと仕事のちよつとした合間に考えたりしています。仕事でぐちゃぐちゃになった頭を解きほぐすのにとってもいいです。忙しい時でも笑っていただけらいいですね。

